

認知症高齢者・家族支援における  
ナラティブ・プラクティス  
——「人生の木」を活用した当事者・家族参画と  
多職種連携の推進——

Narrative Practice in the field of supporting elderly and  
family with dementia  
——Promotion of participation and collaboration in Application  
of the “Tree of life” ——

安達 映子\*  
Eiko Adachi

## 1. 関心の所在と目的

近年ソーシャルワーク実践においては、支援過程における当事者及びその家族とのパートナーシップ形成と参画、またより包括的な支援を実現するための多職種・部門間の協働と連携が重要であるとの認識が高まっている。こうした認識の背景には、当事者の抱えるニーズや課題が複雑化しているだけでなく、支援ならびにサービス提供主体もまた多元化・多領域化していることが第一にかかわっている。同時に、専門職による判断を中心とする支援プロセスへの反省から、当事者の主体性と力量を中心化するべきであるという倫理的な視線がここに向けられていることも、見逃すことはできない。<sup>10)11)</sup>

認知症高齢者・家族支援の領域においても、こうした参画と連携の基盤を整えるべきことは言を俟たない<sup>1)2)</sup>。だが、高齢者・家族が実際の支援プロセスにどう参画できるのかについて、理念を超えた実践的な議論は未成熟である。多職種連携については強調されるものの、それが求められる認知症高齢者の尊厳保持や家族関係の強化・継続にどう具体的に寄与しうるのかについては、検討が行き届いていないのが現状であろう。

本稿では、このようなソーシャルワーク実践の間隙にあって、ナラティブ・アプローチの手法のひとつである「人生の木」<sup>5)~8)</sup>に着目する。その援用が協働参画と多職種連携を志向する支援実践においていかなる有効性をもつのか、事例提示により検討することを目的としている。

---

\*立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：ナラティブ・アプローチ、認知症高齢者、家族支援

## 2. 視点および方法

### (1) ナラティブ・アプローチの視界

「人生の木」という方法について説明する前に、ナラティブ・アプローチの概略、特に前提となっている認識論・視点にふれておきたい。ホワイト (White,M.) とエプストン (Epston,D.) の「物語としての家族」<sup>13)</sup>によって道が開かれたナラティブ・アプローチは、現実是我们たちの相互行為、すなわちコミュニケーションにおいて構築されているという社会構成主義 (social constructionism) の認識論を基盤にしつつ、人生の意味に着目し、これに物語的手法により接近していこうとする方法論である。ここには、「問題」がその語り方／語られ方において問題化されること、言い換えれば、そこに異なる語り方＝ストーリーが生まれれば、「問題」もまた姿を変えることが含意されている。「ナラティブの多義性」に関心をはらい、対話の中でその攪乱と増幅を意識しながら新しい物語、もうひとつの物語＝オルタナティブ・ストーリーを生み出すことがこの支援論の眼目であるといえる。<sup>9)12)</sup>

ナラティブ・アプローチがソーシャルワークにとって寄与的なのは、こうした「問題」を問題化する個人の語り＝ドミナント・ストーリーが、社会の中で優勢な物語と切り離せないこと、個人のストーリーの変容は社会変革をも志向することが、射程に入っていることに由来する。ソーシャルワークが、人々の生活／人生にもたらされる課題を個人と環境との接点においてとらえようとするとき、ナラティブ・アプローチのもつこの人と社会との不可分性への眼差しは、きわめて重要だと考えられる。

そしてもう一つナラティブ・アプローチの有利さは、人々が語り直し、オルタナティブ・ストーリーを描くための具体的な方法論を備えているところに見出せる。「問題」を人々と切り離して語るための「外在化する会話」や、オルタナティブ・ストーリーを確かなものとするべく重要な人々を思い出しその語りを招き寄せる「リ・メンバリングする会話」など直截で豊かな質問と会話の進め方が明示されていることこそ、実践の推進力となるナラティブ・アプローチの力であるといえるだろう。

### (2) 語り直しつなげるための「人生の木」

「人生の木」とは、ダルウィッチ・センター財団 (Dulwich Center) のデンボロウ (Denborough,D.) と心理学者であり東南アフリカ地域の人々・子どもへの心理社会的支援を行う NGO/REPSSI で活動していたヌクベ (Nucbe,N.) が、上述のナラティブ・アプローチを具体化するために開発した手法である。語る人の力が増す方向で、自分の人生について語る／語り直すことを支えるための手段として木に自分の人生を託して書き込むのだが、ワーカーとの対話を通して、ないしは家族や支援職等との協働的な作業として、実施することが可能である。

もともとこのワークは、HIV/AIDS にまつわる様々な喪失と闘っている人々を支える

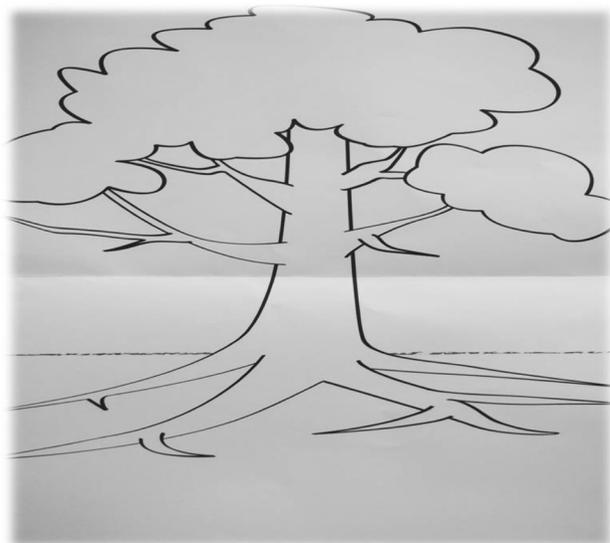


図1

ものとして開発された。困難な状況を生き抜く上で、人生を意味づけ、生き続けていく上での希望を導くことを意図するこの取り組みは、そこに生まれる語りを豊かにする対話、これを他者と共有することでもたらされるつながりの確保が志向されている。

通常は、まず自分にとってこのましい姿の木を紙に描くことから始めるが、この部分についてはテンプレートを用意することもできる（図1）。その上で、以下の6つの部分が必ず含まれるように、対話を進めながら木に書き込む作業を行っていく。

- ①根：どこから来たのか－その方の今をもたらした人々・あるいは経験
- ②地面：今生活の中で、何を選び行っているのか、どう過ごしているのか
- ③幹：大事にしていることは何か・どんな技術や能力をもっているか・貢献をしてきたか
- ④枝：視野と展望－今とこれからをどう見通し、何を望んでいるか
- ⑤葉：重要な人々－その方にとって重要な人はだれか・どのように重要か
- ⑥果実：託された遺産－これまで受け継いできたものや守ってきたもの
- ⑦花と種：託したい遺産－自分に続く人々・世代に引き継ぎたいもの・発展させてほしいこと

### 3. 倫理的配慮

本稿で提示する事例は、当該家族と実施施設の許諾を得た上で、趣旨に反しない範囲で内容改変・提示物の再構成を行っている。個人情報保護に留意し、倫理的配慮がなされていることを明記する。

#### 4. 事例

##### (1) 概要と経緯

ヤスハラさん (仮名) : 80歳・男性

家族 : 長男・50歳 (同居) / 次男・46歳 (別居)

ヤスハラさんは、10年前に妻に先立たれ、離婚し生家に戻った長男との二人暮らしであった。次男は30分ほど離れた場所で单身生活をしている。土木関係の仕事を退職したのちは、自宅周辺にある畑仕事を続けながら生活していたヤスハラさんだったが、「畑の作物が盗まれる」などの訴えからの近隣トラブル、農機具の消費者被害などが続き、2年前に受診しアルツハイマー型認知症と診断された。認定を受け要介護2となつて、長男不在時の昼間についてはデイサービスやヘルパーで支えようとしたが馴染むことが難しく、昼夜を問わない徘徊なども起こるようになり長男・次男の就労に支障がでる介護困難な状況となつていった。

この時点で要介護3となつており、特別養護老人ホームへの入所申込、半年ほどの待機期間を経て入所となつた経緯である。入所時オリエンテーションの時点で、在宅から施設への

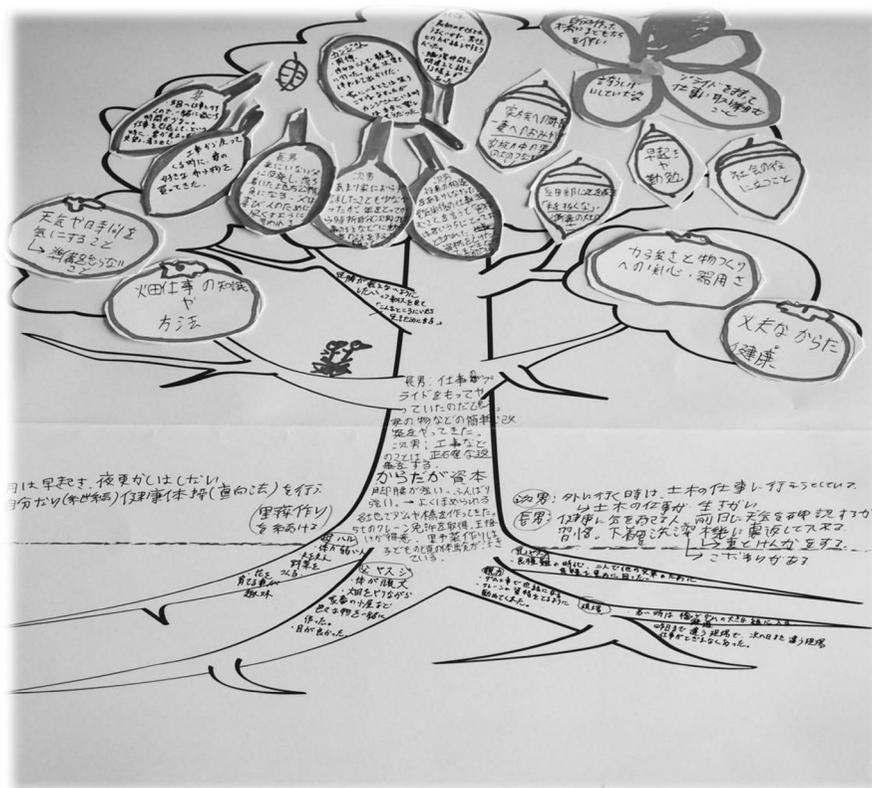


図 2

スムーズな移行と支援計画策定に向けて「人生の木」の作成をおこなうことが提案された。

## (2) 実施結果

「人生の木」作成は、ヤスハルさん・長男・次男・生活相談員・インタビューアとして筆者が参加し、5名で行った。できあがった人生の木が、図2である（個人情報保護のため内容を一部改変）。これを作成するための対話と作業の中で、ヤスハルさんの物づくりへの情熱やそれまでの努力、能力、またそれが父親との幼少時の生活や経験ともリンクすることがわかってきた。さらに長男・次男に、それぞれ違った形でヤスハルさんの人生が引き継がれていることが見えてきた。これ以外にも、ヤスハルさんの現在の生活習慣やその中での健康への強い関心、準備や規則正しさを大切にすることが本人や家族から語られ、生前の妻や幼少時の子どもたちとの関わりや思い出も示されることとなった。

この取り組みをふまえて行われた施設サービス計画では、これらからみえてきたヤスハルさんの強みや能力、また大切にしていることなどが継続ないし活用されるよう策定が進められた。具体的には、土木技術の活用や生活場面の健康維持においてこれまでのヤスハルさんの生活習慣を維持するよう配慮された内容が明記されることになった。

また、「人生の木」作成を協働で行ったことは、長男・次男とヤスハルさんとのつながりを再確認するだけでなく、ヤスハルさんとその父親との関係も認識する機会となった。この〈父から息子へ〉という二世代にわたる家族の歴史の共有、また亡き妻を含めた家族のつながりの深さが、具体的な出来事・記憶の想起とそれをめぐる本人・家族・支援者間のやりとりのなかで再確認されていった。こうしたプロセスを経て、長男・次男による特別養護老人ホームの行事への積極参加、頻回な面会が実現され、施設入所後も家族が支援のパートナーとしてヤスハルさんを支えることに大きな役割を果たすこととなった。

「人生の木」作成後に実施されたカンファレンスでは、生活相談員・ユニットリーダー・担当介護スタッフ・施設ケアマネ・居宅ケアマネ・看護師・管理栄養士が「人生の木」を共有した上で、施設サービス計画の確認と、その支援内容の意味－物づくりへの情熱を活かしこれをADLの維持につなげることや、家族関係の継続を通してQOLの確保に努めること－を協議・確認することができた。

## 5. 考察

### (1) 認知症高齢者の尊厳保持と「つながり」の確保

「人生の木」を、ヤスハルさん自身の語りとそこに重ねた二人の息子たちの語りで完成させていくことは、ヤスハルさんが成してきたことや大切にしてきたことを確認・再発見し、共有するプロセスとなった。それは、認知症の進行に伴い見えにくくなっていたヤスハルさんの価値や強み、貢献が呼び戻されることになり、尊厳の基盤を感知・具現化する作業であったと考えられる。

認知症高齢者の支援において、尊厳保持への感受性は不可欠な要素である。だが一方でこのことは容易ではない。なぜなら、認知能力低下に伴う行動変容は、しばしば高齢者を減価し無力化する方向で作用し、周囲の人々はそこに尊厳を託すものを見失いがちになってしまうからである。家族や支援者が認知症高齢者の尊厳をしっかりと見つめ支えるためには、これを見据えることのできるストーリーが必要である。「人生の木」をめぐって共に語り、またそれを事後的な場面を含めて共有することは、尊厳保持に寄与するエピソード、出来事、価値、信念を統合しつつ新たにストーリーを織り上げることにほかならない。

同時にこの「人生の木」作成過程は、家族自身が自分たちのつながりを再認識する時間ともなる。ボス (Boss,P.) が指摘するように、認知症は当事者が現にそこにいるにもかかわらず、〈本人らしさ〉が失われてしまうという意味で「あいまいな喪失<sup>3)</sup>」であり、家族は深い喪失感の中で負担の多い介護を迫られることになる。「人生の木」はそうした中で、認知症高齢者と家族のつながりを確認し、元来の姿－人生の中での達成や価値、力強さに焦点を当てながら－を再び呼び込むことになる。このリ・メンバリングの過程は、単に過去を思い出し懐かしむだけではなく、まさに今の高齢者と家族の関係性を構築しているとみることが何より肝要であろう。

加えてそれは、支援計画の内容について当事者・家族が具体的に参画することを可能にし、施設入所後の生活にも家族が関与する余地を広げることになった。家族と支援ネットワークのパートナーシップを理念に留めず築くためには、現実的な機会と工夫が求められる。「人生の木」は、当事者と支援専門職をフラットな場に置き直しつつ、つないでいくツールとして有効だと考えられる。

## (2) 包括的な理解による支援計画作成と多職種連携

ブルナー (Bruner,J.) は、われわれが世界や物事を理解・説明するときに2つの様式があることに注意を払うべきことを強調する。ワーカーが、ヤスハルさんと家族とともに「人生の木」の作成過程に加わることは、今現在のヤスハルさんの姿を分類・整理して明確化しようとするカテゴリー的思考すなわちアセスメント的理解に、ヤスハルさんの人生そのものを、その価値や経験の意味に即した物語として理解しようとするナラティブ的思考いいかえるとストーリー的理解を付け加えることになり、より包括的な当事者理解への可能性を拓くことにつながる。

通常多職種連携では、職種特性とその専門性による、より多角的・多面的なアセスメントがメリットとして指摘される。このスタンダードな作業に加えて「人生の木」を多職種が共有することは、当事者のストレングスや全体に着目し、できなくなった今の姿を超えて生き抜いてきたこれまでのありようを具体的に受け取ることを可能にする。このことは、個別性に即した支援計画を策定・実施する上で、きわめて貴重な情報収集であることをまずは意味する。

加えて、こうした生き方の軌跡にふれることは、自ずと当事者への敬意と関心を引き起こす。「人生の木」では、人間関係やライフスタイルの事実を留めるだけでなく、人々の信念や価値観、継承に焦点が当たるように工夫されており、このことが尊厳保持への感受性を鋭敏にすることはすでに述べた。包括的に生命、生活あるいは人生であるところの「ライフ」を支えていかなければならない支援の基盤に尊厳保持が位置付きその重みを分かち持つことは、単に当事者にとって有用なのでない。尊厳のもとに一人の高齢者とその家族に出会えることは、支援者側の士気と動機づけをも高めるのみならず、これを結節点とする力強いチームワークを招きよせる。そして言うまでもなく、そのチームワークの結果が再び当事者の利益に還元されていくことを目指して、「人生の木」は取り組まれていかなければならないのである。

## 文 献

- 1) 安達映子：高齢者虐待対応における協働参画型ソーシャルワーク実践－ソリューション・マップと FTDM を活用したパートナーシップ形成－. 立正社会福祉研究, Vol.14. No.1 : 8-16, 2012.
- 2) 安達映子：家族協働参画型実践の展開：高齢者福祉分野におけるファミリー・グループ・カンファレンスを取り入れた家族参画型サービス計画策定の試行を通じて. 立正大学社会福祉研究所年報, Vol.12. : 29-39, 2010.
- 3) Boss,P.: Ambiguous Loss. Harvard University Press, Boston, 1999 (南山浩二訳：「さよなら」のない別れ, 別れのない「さよなら」－あいまいな喪失. 学文社, 2005)
- 4) Bruner,J.: Actual minds, possible worlds. Harvard University Press, Boston, 1986. (田中一彦訳：可能世界の心理. みすず書房, 1998)
- 5) Denborough,D.: Collective Narrative Practice: Responding to individual, groups, and communities who has experienced trauma. Dulwich Center Publications, 2008
- 6) Denborough,D.: Retelling The Stories of Our Lives. Norton., 2014 (小森康永・奥野光訳 (2016) 「ふだん使いのナラティブ・セラピー」金剛出版)
- 7) Dulwich Center-The Tree of Life.: retrieved from <http://dulwichcentre.com.au/the-tree-of-life/> 2016
- 8) Hughes,G. : Finding a voice through 'The Tree of Life': A strength-based approach to mental health for refugee children and families in schools. Clinical Child Psychology and Psychiatry, Vol.19(1) 139-153. 2016
- 9) Morgan,A. : What is narrative therapy?: An easy-to introduction. Dulwich Center Publications, Adelaide, 2000. (小森康永・上田牧子訳：ナラティブ・セラピーって何? 金子書房, 2004)
- 10) Payne,M. : Modern Social Work Theory. 3ed. Plaglave Macmillan., New York, 2005.
- 11) Pease,B. and Fook,J. : Transforming Social Work Practice: Postmodern Critical Perspec-

- tive. Routledge, London, 1999.
- 12) White, M. : Maps of Narrative Practice., Norton, New York, 2007 (小森康永・奥野光訳 : ナラティブ実践地図. 金剛出版, 2009)
- 13) White, M. and Epston, D. : Narrative Means to Therapeutic Ends. Dulwich Center Publications., Adelaide 1990 (小森康永訳 : 物語としての家族 金剛出版, 1992)